

## 研究主題 文章表現力向上の研究 －読解力と記述力、表現力の関連性から－

**要約**：現場で必要だと感じている「書くこと・記述」力の向上のために、どのような課題が存在するのか、どのような指導法が効果的かを探った。現状を把握するため調査したところ、今まで学習してきた「書くこと・記述」が系統的に行われておらず、断片化しているからではないかということが考えられたので、「書く・記述する」活動を基軸にして、読解力や要約力をつける指導が必要だと感じた。これまでは読書など、読むことで「書く・記述」力がつくと考えていた生徒の意識が、実践授業後では実際に書き慣れることが必要だと大きく変化した。

**キーワード** 書くこと、読解力、記述、相手意識、クリティカル・リーディング、要約力、資料読み比べ、連鎖作文

### I 主題・副題の設定理由

#### (1) 研究のきっかけ

現場で生徒たちと接していて感じることは、「書く・記述」能力の著しい低下である。中学校は教科担任制とはいえ、他教科の同僚教師の間でも感じ方や受け取り方こそ違えど、それは共通した認識である。

確かに、課題作文などで自分の感想・意見を記述させたり、定期テストなどで「50字程度で自由に書きなさい」といったような問題には、1文字たりとも原稿用紙のマスが埋まらない生徒をよく見かける。

「書く・記述」の学習については、初発の感想や、段落の要旨をまとめるなどの機会や課題の手だてはいくらかもあるが、作業に時間を取られることもあり、授業時数確保云々で、そのための指導に時間を取っていない…いや、物理的に取れないのが現状だ。

こうした中で、国語教育を担当する一人として何ができるのか、また、何をなすべきかを明らかにしたい…というのがきっかけである。

#### (2) 研究の必要性

ペンが進まない生徒に対して、どのように書くかについても「こう書いたら？」と例示すると、それをそのまま書くことも珍しくない。安易にヒントや助言に流され、それらをもとにして考えようという創造性に欠ける実態がある。

生徒の口をついて出る言葉は「何をどう書いたらいいかわからない。」という常套句だ。それは、今まで学習してきた「書くこと・記述」が継続的に行われておらず、断片化しているからではないか。

そのため、この状況を少しでも打破すべく「書く・記述する」活動を基軸にして、自分の考えをしっかりとって論理的に文章を書く工夫をす

ること、書くために読む活動や目的意識をはっきりさせる読解力、長い文章の中から要点をつかんだりまとめ上げたりする要約力、活字を鵜呑みにするのではなく批判的に読む力などを高める指導が必要だと感じている。

「書く」という行為に慣れることで、自分の意見や考えをまとめられるようになり、さらに、発表会などで自分の書いたものが他者から認められれば、自己表現力の育成にもつながると考えた。

#### (3) 研究の目的と方法

##### ・研究の目的

「書くこと・記述」力の向上のために、どのような指導法が効果的かを探る。

##### ・研究の方法

- ① 現行学習指導要領や各種学力テストなどの分析結果から「書くこと」の課題と指導改善策を基幹とする。「書くこと」の効果的な指導に関する先行研究は多くあるが、その中の共通する課題や、今後身に付けていくことが求められる力と研究主題の接点を見いだす。
- ② 定期テストでの記述問題に関して、観点別評価の参考材料の一つとしているが、そこで「書くこと」がどのように出題され、評価にどう生かされているのかという現状と課題。
- ③ 生徒が文章を書く際の実態とその背景を探る。
- ④ 「書くこと」と「活字離れ・読書活動」について意識調査を行い、読書活動が「書くこと」に直結しているのか、ということの現状把握と実践授業の課題を見つける。
- ⑤ 「書くこと」に主眼を置いた授業実践  
④のアンケート結果から考えられる課題をもとに、教材の指導法やその他のプログラムを用意して授業を行う。
- ⑥ 成果と反省・まとめ

## II 「書くこと」の実態と現状分析

### (1) 先行研究と研究主題の接点

先行研究の論文・識者の意見によると、「書くこと」指導の課題として、生徒の意識は小中高問わず「嫌い・苦手」という実態が共通している。菅原稔氏は以下のように述べている<sup>\*1</sup>

ひとまとまりの文章・作品を生活の中の事件や出来事に取材して書かせようとする指導は、児童の「書きたくない」「何を書いて良いかわからない」という思いにつながっていく。

本文中の「児童」は「生徒」と読み替えても差し支えないだろう。生活文を中心とした論だが、意見文などでも同様のことが言える。

では、反対に生徒が好んで書いているのはどのような文章か。中学生の実態として女子の間で友達に宛てた「お手紙」がまず思い浮かぶ。また、携帯電話の所持率も高くなり、ほとんどの家庭でインターネット接続がなされているといった生活環境では「メール」も加わる。

こうした「お手紙」にしろ「メール」にしろ、書いた本人が特定の相手を意識している…という点に、苦手意識の払拭の糸口を探ることができると考えた。

### (2) 苦手意識からの脱却とその指導法

記述力を高める指導として水戸部修治氏は以下のように指導の充実を述べている<sup>\*2</sup>。

- 1 表現様式に応じた指導の充実
- 2 プロセスに応じた重点的指導の充実
- 3 教科を貫く力としての記述指導

特に1の「相手や目的、自分の立場や考えを明確にし、どう書くのかをつかむことができる」という点、また、相手意識という点について、森田真吾氏は相手意識について以下のように述べている<sup>\*3</sup>。

一点目は「相手意識を漠然としたものに留めたままにしない」、二点目は「とりあえず書く」という手だてを工夫する必要、三点目は「完璧を求めない」という点。

前項でも述べたように、特定の相手に対して書くことはいとわなことがうかがえるので、実践授業ではこれらを意識した授業設計を試みることにした。

### (3) 表現力のある文章とは

PISA型読解力を参考に表現力のある文章

の要件として次の5点を挙げる。

- 1 相手意識がはっきりしていること
- 2 目的がはっきりしていること
- 3 意見・主張がはっきりしていること
- 4 クリティカル（批判意識）であること
- 5 論理的であること

書くのが苦手な生徒に対してこの5点を全て求めることは難しい。そこで、前項までの考察から「相手意識」に焦点化した内容の文章が書けるような手だてを講じることとした。

### (4) 定期テストでの記述問題の出題傾向分析

#### 1・「書くこと・記述」の解答状況について

5月の調査によると、1学期中間テストの内容はとて平易で、各学年とも無答率はかなり低い。

#### 2・記述の出題の内容と傾向

完全な創作ではなくワーク・問題集などと似かよっている点がある。また、授業担当者の指導内容や、板書などの確認の要素が強い。そのため、本当の思考力・判断力・表現力をみる記述の出題とは言い難い。

#### 3・採点基準について

解答が本文中の言葉や文の一部を引用してまとめれば、現状ではほぼ正答というものもある。それは、2で述べたような理由である。

#### ●課題・問題点

「書くこと」の出題形式はこれでよいとはいえない。授業時数は厳しいが、テストとは別に課題に沿ったレポートの内容などで評価することも必要である。

### (5) 生徒の書く文章の実態

生徒に文章を書かせることは、授業の他にも意外とある。うまく書いている生徒もいるが、その中には表現や書き方に気になるものもある。書いた本人はそれに気づいてない。例として以下のようなことが挙げられる。

- ① 相手意識の欠如
- ② 文字に対する意識の低さ
- ③ 語彙の貧困さ
- ④ 例えや表現力がなく1語で間に合わせる…など

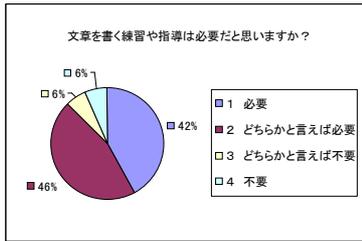
学校のテストや自己PR・推薦、就職すれば企画のプレゼンや報告書などの作成など、第三者が読むことを前提として文章を書く場面は必ずある。文章作成に熟練を求めないまでも、最低限の力を習得しておくことは、中学生・高校生として求められて当然と言える。

\*1 「教育科学国語教育」2005/6 明治図書 菅原稔『書く力が育たない』理由と原因—二つの観点方法から考える—より一部抜粋。

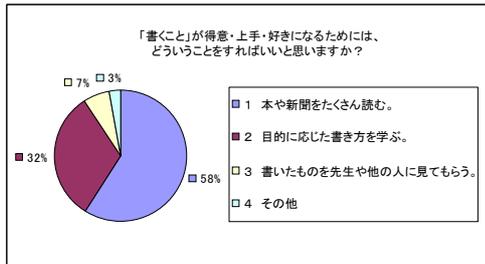
\*2 「実践国語研究」2007/12・1 明治図書「記述力を高める指導法—考え方とポイント—」水戸部修治「教科を貫く国語力としての記述力の育成」より引用（一部のみ）。

\*3 \*2 同書掲載 森田真吾「書くにあたって『相手を意識する』ということ」より一部抜粋。

## (6) 「書くこと」「読書活動」意識調査<sup>\*4</sup>



文章を書く練習や指導について、約9割の生徒が「必要」という認識でいることがわかった。特に3年生では6月の時点で既に95%に達していた。また『書くこと』が得意・好きになるには？という問いに、約6割の生徒が「本や新聞をたくさん読む」と回答していた。



だが、『書くこと』のために「本や新聞を読む」という意見が多い割に、左の結果のとおり、読書に対する意識は低いと言わざるを得ない。

また、新聞を読むか？という問いには半数近くの生徒が「読む」と答えているが、その内訳はテレビ欄や天気予報・4コママンガといった「見る」に近いものであった。

### ・朝読書

学校で読書の機会を設けていても、それ以外(家庭など)では読む機会が少ない。

### ・新聞

「読む」とはいえ、その実情は「見る」程度で、記事を読んでいるとは言い難い。

こうした課題から、実践授業で取り組んでみる内容としてのようなことが考えられた。

- 1 決められた時間で、ただ単に文章を読むのではなく、その内容を理解・評価しながら「読む力」を高める授業。
- 2 書くことが上手く・得意になるためには、約6割の生徒が「本や新聞をたくさん読む」と答えているが、その割に読書意識は低い。「実際に書いてみる」ことが大事だという意識を高める授業。
- 3 教科書以外のさまざまな文章や資料を読んだり、自分の意見を記述したりする授業。

## III 実践授業

「書く」負荷を軽減し、学習活動の工夫をすることが、効果的である。そこで、

- 【視点①】…「書くこと」を中心にして、他の領域「話すこと・聞くこと」「読むこと」と関連づけた授業を組み立てる。
- 【視点②】…フォーマットを用意したり、手順を形式化して「書く」機会を増やす。
- 【視点③】…「書くこと」の抵抗感をなくすため、「書いてみたい」「書くことがおもしろそう」という生徒の意欲を喚起する課題・場面等の設定をする。

これらの視点を持った授業を計画した。

また、上記3点に加えて、文部科学省から示された「読解力向上プログラム」<sup>\*5</sup>にある、PISA型読解力を意識した指導にも取り組むことにした。指導のねらいで挙げられている7点から、今回の実践授業の教材で利用できそうなものとして、以下の3点<sup>\*6</sup>を取り入れた。

- 【目標①】から、
  - ii クリティカルリーディング
- 【目標②】から、
  - i テキストの内容を「要約」「紹介」する
- 【目標③】から、
  - ii 「幅広い読み物」に触れる

### (1) 授業の導入で

新単元の導入時に行っている漢字小テストを、新たな試みとして、書き取り問題に限って口頭で出題することにした。単にペーパー上の字を見て書くのではなく、口頭で出された問題を耳で聴いて理解して書き出す…という[視点①]に基づく複合活動を考えて実施したものである。

### (2) 説明文の授業展開

説明文の授業展開の常套手段として、構成をつかむ展開からではなく、問題提起に対する答えを読み取る部分読みを行い、その後で構成全体をつかむ逆方向の展開で、本文の要点を押さえることとした。本教材では読み手に対する問題提起型の文8カ所を探し出し、ノートに視写させる学習活動を取り入れた。

確認作業は各自が本文に傍線を施した部分を全員で読み上げる方法をとった。中学生は授業で口が重くなり、積極的な発言が少ない。声を発しやすい状況を作ることと「生徒指導の3機能」を関連づけるためだ。また、[視点①]に基づく複合活動を意識しての展開でもある。

\*4 在籍校でのアンケート調査結果。対象は全校生徒の過半数に当たる約280名(1年生3クラス97名, 2年生3クラス100名, 3年生2クラス78名)で、6月中旬から下旬にかけてのべ6日間かけて実施した。

\*5 文部科学省 平成17年(2005)年12月。

\*6 同上 学校での取組～3つの重点目標～より一部を抜粋。

### (3) クリティカル・リーディング

国語科教育の中核である「読解」は、教科で学ぶべき普遍の力として、今後も不可欠である。加えて、これからは文章を積極的に読み込む力も求められている。その一つが「クリティカル・リーディング」だ。生徒に説明しても、なかなか理解しづらいので、俗に「つっこむ」とするが感覚としてつかみやすい。「挙げ足取り」になりそうだが、最も簡単な「つっこみ」なので、多少のことは寛容すべきだろう。

この「つっこみ」のあとに「評価」が必要なのだが、今回の指導例でも生徒は問題点・疑問点を指摘すること＝PISA型読解力では「情報の取り出し」はできても、すぐに「評価」まではできない。

今回のように教科書の説明文で指摘するのは、本来なかなか難しいことだ。ただ、「クリティカル・リーディング」のエッセンスを与えることはできたと思う。その意識を絶えず持ち続けることで読みの力も鍛錬されていくだろう。

### (4) 要約力指導

今までの「要約」とは、教師が学習の総括として提示していたことが多かったのではないだろうか。従って、生徒が「要約は苦手だ、できない。」というのは、やり方を指導していないゆえに身につけていないからだとと言える。

要約には、キーワードを利用する削ぎ落とし型とトピックセンテンス型の2つに大別されるが、今回は教材が説明文ということもあり、削ぎ落とし型の指導形態をとった。

パワーポイントでスライドを作成し、素材文がどのように要約されていくのかを視覚的に認識できるように工夫を凝らした。

特に3年生の授業では効果的だった。学年によって提示する素材も興味しながら、さらに効果的な解説ができるようにしなければならない。さらに、トピックセンテンス型の要約や削ぎ落とし・トピック複合型、小説・物語などの文学的文章にも適用できるように努めることが必要。

### (5) さまざまな資料を読み比べる

今回は活字の読み取り中心の指導のため、新聞記事を指導資料化した。新聞を教材化しようとしたのは、6月に行ったアンケート（前ページグラフ参照）から、視点や意識を活字に向けることはできないだろうかと考えたからである。

一般に家庭で購読している新聞は1紙であり、他紙との読み比べの経験はないと言っている。そこで、ある1つの話題・事件を伝える新聞各紙の紙面を提示し、見出しや報道内容（記事）を読み比べて、事実は何かということや新聞記

者・編集者の意図・ねらいはどこにあるのかを考える契機とした。

### (6) 連鎖作文

「連鎖作文」は意見文を書く際に[視点②③]に基づく学習活動として取り入れた。素材選択から構成のヒントまで一人でなかなかできないようなことを、共同作業で仕上げることで達成感を得られるようにした。

連鎖作文で材料が集まったにもかかわらず「書き出しや方まとめ方が難どのように書いていいかわからない」ということが多かったので、やはりフォーマットが必要だろう。書き方が画一的になるという懸念もあるが、一つの型を習得したと考えればいいのではないのか。

### (7) 朝の5分間プリント

実践授業では教科書を使っての指導が主体になるため、従来より書く機会を設けても限度がある。授業では不足しがちな物理的に「書く」機会を意識して作り、朝読書の時間を利用して1日おきに週2回のプリント学習を行った<sup>7)</sup>。

#### 朝のプリント学習の内容

- ① 視写
- ② 新聞3行広告を文章に書き換え
- ③ 4コママンガの説明 …など

①は、短期間でも速く多く書けるようになる効果が表れた。単純作業にもかかわらず、私語一つ無く無心に取り組み、実践後のアンケートでも関心は高いという結果が得られた。②③では、個々のレベルで読んだ内容を文章化すること、つまり記述力・表現力の弱さが見られた。

## IV まとめ

※書くことが上手くなるためにはどうすべきか

	6月	10月	増減
本や新聞を読む	72	52	-20
目的別の書き方を学ぶ	19	6	-13
書いたものの添削	6	19	+13
書き慣れる	3	23	+20

(単位%)

実践前の6月では、その手だてとして7割を超える生徒が「本や新聞をたくさん読む」と回答していたが、実践後の11月では大幅に減った。その逆に「書く機会を増やして慣れる」が増えている。このことから、活字を読んだり知識を学んだりといった「見聞き」をすることより、実際に「書く」という行為がとても有効だと印象づけることができたと言える。今後はさらに研鑽に励み、ワークシートや教材研究・開発および効果的な指導の工夫に努めたい。

\*7 本実践にあたり、1はPHP研究所「小学校の『作文』を26のスキルで完全克服」向山洋一編・師尾喜代子著第1章参照。2は三省堂「気軽に楽しく短い時間で力のつく作文学習50のアイデア」教育文化研究会編参照。3は旺文社平成15年度版「国語表現I」参照。